東港東隆宮

小山樓太郎1933年（昭和8年）五郎大觀臺北南國寫真大觀社

東港東隆宮では主神に「温府千歳」を祀っています。これは温王爺とも呼ばれ、もともとは唐の時代に進士の地位にあった人物で、全国奉行に出かけた際に遭難し、命を落としてしまいました。その後、福建、浙江地方の沿海を往来する船舶を見守る神様として扱われるようになりました。1706(康熙45)年に東港南仔頂(現在の鎮海里)で、一晩のうちに大量の材木が福建地方から流れ着きました。その上には「東港温記」と書かれていました。信者たちはこれを神意として受け止め、ここに寺廟を建て、温王を祀ることにしました。また、1894(光緒20)年には、東港で津波が発生し、東隆宮は波にのみ込まれてしまいましたが、この時、温王爺は「浮水蓮花」の洞窟に新しい寺廟を建てるようにと指示を授けました。これが現在の東隆宮の場所になります。

迎王祭典

そして、1763(乾隆28)年に道士が福建から東港を訪れた際、住民たちが疫病に苦しむ姿を見て、福建一帯に伝わる疫病を追い払う儀式を伝授します。これが後に東隆宮の「迎王祭典」となりました。

「迎王平安祭典」この祭典の重要な目的は、神々の神威によりこの土地の邪悪なものや疫病など汚らわしいものを取り除き、人々が健康で平安に暮らせるように祈ることです。そして、地元の人たちの結束力をより強固なものにします。地元の人たちは迎王祭典を非常に重視しており、故郷を離れている人たちも漁師たちもみな、祭典の前には戻ってきて参加します。

迎王平安祭典は合計七泊八日間にわたって行なわれ、三年に一度催されます。牛年、龍年、羊年、犬年に当たります。毎回、迎王祭典の日程は神様にお伺いを立ててから公表されますが、大体、新暦10月あたりに催されることが多いです。

代天巡狩である大千歳は、深い友情の契りを交わした36名の中から天意によって一名が選ばれます。王爺を迎え、降臨した後には、「帥灯」や「帥旗」にその年の大千歳の名前を記します。そのほか、二千歳、三千歳、四千歳、五千歳も訪れ、これに中軍府と地主温王爺も加わり、合計で七台の神輿となります。

迎王祭典のプログラム

「迎王平安祭典」のメインプログラムは「中軍府の安置、王船の製造」、「進表」、「代天府の設置」、「請王(王爺を迎える儀式)」、「過火安座(火渡り、安置)」、「出巡繞境(集落内を練り歩く儀式)」、「遷船繞境(船を移動させ、集落の中を練り歩く儀式)」、「和瘟押煞(疫病を鎮める儀式)」、「送王(王爺を見送る儀式)」。

東隆宮の七角頭(親分)による神輿チーム

東港にある東隆宮では迎王祭典の中、古い笠をかぶり、チームごとに異なる色の「轎班服」を着た神輿チームを目にすることでしょう。「七角頭」は世襲制で、迎王祭典では、子供も轎班服を着ているのを目にするはずです。東隆宮の

迎王祭典では、代天巡狩千歳爺が5名祀られています。これに中軍府、温府千歳などが加わり、計7名の神様となっています。7名の千歳爺の神輿と王船の船具は、7角頭の神輿チームがそれぞれ請け負います。

中軍府の安置、王船の製造

中軍府を安置する儀式は、神界がすでに平安祭典の準備階段に入ったことを意味します。迎王祭典の2年前からその年の中軍府が訪れ、王船が正式に製造され始めます。最初にその年の中軍府が安置され、王船の建造を監視します。

進表

「進表」は迎王大科年の旧暦6月に催されます。東隆宮に祭壇が設けられ、大総理と各レベルの総理が集落の人々を代表し、頭を下げて跪き、申し文を読み上げます。天河宮の代天巡狩千歳爺が地域を清め、除疫のために降臨することを祈ります。

代天府の設置

代天巡狩の千歳爺が皇帝からの命令で「按察」という地位に着き、一時的に逗留する場所を「代天府」と呼びます。代天府は東隆宮の正殿に設置されます。関係者以外は立ち入り禁止となります。儀式に関係する実行スタッフのみ、入ることができます。

請王(王爺を迎える儀式)

儀式はすべて海辺で執り行なわれます。参加する神輿や陣頭(神様に扮した人たち)は列をなし、全員で海辺に集結します。神輿チームは御神籤をもって海の中を入ったり出たりし、千歳爺の到着を待ちます。その後、その年に招く千歳の姓氏を記し、訪れた際には爆竹や銅鑼を鳴らし、王爺を迎えます。

過火安座(火渡り、安置)

王爺を迎える儀式の後、「代天巡狩(天に代わって集落を巡視する役目)」である千歳爺は集落を練り歩き、その後、代天府へと進みます。安置される前には、火渡りの儀式が行なわれます。この儀式では5つの方角に材木を積み重ね、これを燃やし、王令と王轎を清めます。

出巡繞境(集落内を練り歩く儀式)

王駕出巡(王爺が集落内を練り歩く)という儀式は、代天巡狩(天に代わって集落を巡視する役目)の神威が発揮される儀式です。つまり、厄除けを意味します。王爺が集落を巡る際には、民衆は路上で列をなして跪き、神のご加護を祈ります。

遷船繞境(船を移動させ、集落の中を練り歩く儀式)

船を運び出すのには、沿道で厄や疫病を追い払う目的があります。追い払うのと同時に、この地区の厄や悪霊、災いを持ち去ります。沿道の各家庭ではお供え物や香呂を準備し、代天巡狩千歳およびその部隊の将軍

神様が地域を守ってくれることに感謝とねぎらいの気持ちを表します。東港では紙で作られた身代わりの人形も準備され、家庭内の厄を払い、運勢が良い方向に変わるように祈ります。身代わり人形は悪い運を持ち去ってもらうためのもので、これを千歳爺に託します。

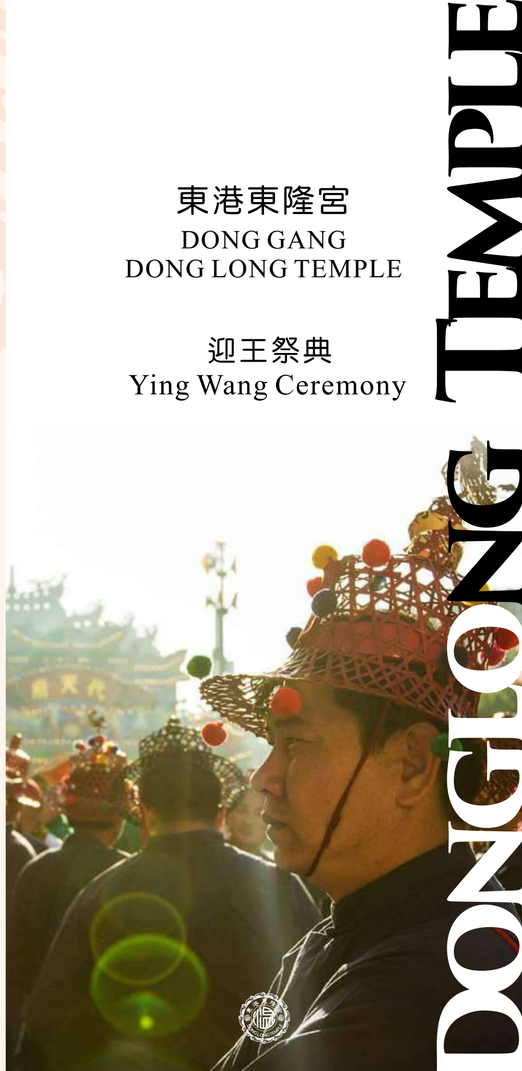
和瘟押煞(疫病を鎮める儀式)

王爺を見送る儀式の前日晩には王船で法会が行なわれ、厄払いの儀式が催されます。もし、大きな厄や手強い悪霊で厄払い儀式の効果がない場合は、道士は作法に則り、疫病や悪霊を王船に押し上げ、千歳爺とともに天の河を渡ってもらいます。これにより地域に平安がもたらされることが平安祭典の最終目的です。

送王(王爺を見送る儀式)

夜明けになると、各レベルの総理は千歳を神輿に載せ、王船と一緒に海辺へ赴き、王爺を見送ります。王船が海辺に到着すると、金紙の入った袋を一つずつ王船に積み上げます。準備がすべて整うと、水路が開かれ、錨が仕舞われ、爆竹が鳴り響きます。王船が燃やされ、天の河へと見送ります。

王船が燃え始めると、神輿チームに日よけの傘を畳み、笠や腰紐などを外し、さらに銅鑼や太鼓を鳴らすのをやめ、大声で話さないようにお願いします。その後、三日以内は爆竹や太鼓を鳴らさず、戯曲の音も発しないようにします。これは一つには、王爺が再びこの地が歓迎してくれていると勘違いして、戻ってこないようにするためです。もう一つは疫病や悪霊が跡を尋ねて戻ってこないようにするためです。

東港東隆宮
DONG GANG DONG LONG TEMPLE

迎王祭典
Ying Wang Ceremony